

父は臨床検査技師で、地元の病院に勤務していた。私たち家族は、その病院の持つ宿舎に住んでいた。

ある日、父の腕が見込まれ、他の病院から誘いがかかったらしい。条件が良かった。交通費も出す、父の好きな研究もできる、給料も破格で、現在よりも数倍高い。父としては願ったり叶ったりだった。

父からそれを聞いた母も、その誘いを受けるように勧めた。提示された条件が良かったからだろう。母は私や妹にもこのことを教えてくれた。きっと二人を味方に付けて、父を説得しようと思ったのだろう。

なのに、父は「わかった、わかった、考えとくから」と言っただけで、はぐらかすばかりだった。当時私は中学生だったが、この父の態度が不思議でならなかった。条件からしても絶対に異動したほうが良いのに、何にこだわっているのだろうと。結局父は、数年してから新しい病院に移った。

その父は二年前に亡くなった。通夜と葬式を済ませた後、私は母にあの件を聞いてみた。どうして父はあの時、すぐに新しい病院へ移らなかったのか、と。

「あの人は、病院の先代に恩があったの。病院の事務員だった父に『お前、臨床検査技師になれ。お金は病院から出すから』と言ってくれたのが先代で、そのおかげで臨床検査技師になったの。だから、先代が亡くなるまではあの病院で働こうって決めてたみたい。」

そうか、と私は納得がいった。同時に思った。「父らしいな」と。父は義理と人情をだれよりも重んじた人だったからだ。何しろ、仙台への義理を重んじた結果、家族を敵に回してもそれを守ったのだから。

その後、仏壇に手を合わせながら、父に伝えた。

「親父、ごめんな。あの時は誤解してて。けど、親父もきちんと説明してくれば良かったのにな。まあ、親父らしいけど。」